春秋館跡の保存整備に向けた高山社分教場の敷地構成に関する研究

東京農業大学大学院　卜半　　馨

下仁田町西野牧に所在する「春秋館跡」は、高山社の分教場として機能した養蚕農家の遺構であると共に、世界遺産『富岡製糸場と絹産業遺産群』の構成要素である「荒船風穴」の経営母体でもあった。その遺構は現在、下仁田町の所有となり保存整備計画が検討されているところである。しかし、高山社分教場の敷地計画や造園空間に関する先行研究は皆無であり、計画を具体化するための情報が不足しているのが現状である。

本研究は、春秋館跡の保存整備計画を策定するに当たり、重要な類例となる他の高山社分教場遺構の敷地構成や庭園空間を分析し、計画策定の一助とするものである。そして将来的に実施されると考えられる他の分教場遺構の保存整備事業においても、援用できるデータを提供したい。

１．はじめに

高山社の分教場として設置された養蚕農家は、群馬県南部を中心に多数分布しており、高山社の世界遺産登録を機にその研究および保存・修復に大きな関心が寄せられている。

現状、分教場を含めた養蚕農家の研究対象は、主屋や蚕室など建築遺構の構造やその保存・修復、および養蚕業そのものの成り立ちに集中しており、養蚕農家の敷地構成を分析・考察する研究は皆無であった。しかしながら、多く分教場の敷地図や家相図を観察すると、例えば「うじがみさま」が敷地の西側もしくは北西側に配置されている傾向が見られるなど、意図的に設計されていることが指摘されている。

現在、その分教場遺構のひとつである下仁田町の「春秋館跡」では、建物や庭園といった遺構の保存、修復、整備が計画されている。今後このような養蚕農家では、史跡の保存において、構成要素の配置を含めた敷地計画や造園上の空間的特質を考慮した整備計画を策定することが求められる。

よって本研究において、群馬県の養蚕業を代表する立場にあった高山社およびその分教場の造園空間の敷地計画を詳細に分析することによって、そのような整備計画を策定する際の基礎資料を提示することを目指す。

そのためにまず、春秋館跡を中心にいくつか高山社分教場における敷地計画や造園上の空間的特質を簡潔にまとめ、その基礎資料の嚆矢としたい。

２．高山社と分教場

１）高山社とその分教場の歴史

高山社は明治17年に、現在の群馬県藤岡市高山において高山長五郎により創設された、養蚕技術者を育成するための私設学校であり、正式には「養蚕改良高山社」という（以下、高山社と記す）（関口　2022）。しかしながら、高山長五郎は学校の創設の２年後になくなったため、高山社を発展させたのは２代目社長の町田菊次郎である。町田菊次郎は、高山社を高山長五郎の自宅から当時の多野郡藤岡町に移転拡大させただけでなく、生徒数の増加に対応しつつ、養蚕実習を中心とした授業を行うための分教場を開設した。最初の分

教場は、もともと高山社が所在していた高山家住宅（現在の高山社跡）において明治21年に開設され（関口 2022)、その後に、町田菊次郎家などの高山社有力幹部の自宅へと拡大されていくこととなったのである。

分教場は群馬県を中心に、埼玉県や千葉県、茨城県にも設置されたが、特に群馬県多野郡に設置された数が圧倒的に多く84カ所を数えた。確認されている分教場の合計数が116カ所であることを考えても、多野郡におけるその数は圧倒的である。多野郡内において特に分教場が多かったのは、小野村、美土里村、美九里村の３村であり、それぞれ14カ所、13カ所、15カ所の分教場が開設されていた。

このように最盛期には116カ所を数えた分教場も、大正期に入ると生徒数の減少と共に閉鎖されていき、大正13年頃には全ての分教場が閉鎖された。分教場の閉鎖後も昭和40年代まで養蚕業を継続している農家も存在していたが、養蚕業が衰退していくに伴ってこれらの分教場遺構は急速に失われていき、今日では20カ所弱が残るのみとなっている。

２）高山社跡の屋敷構え

前述のように、大正年間に全ての分教場が閉鎖された後、昭和２年には高山社そのものが廃校となり、多くの分教場遺構は時代と共に失われていった。しかしながら、高山長五郎の旧宅であり、高山社の藤岡町移転後は最初の分教場として機能したいわゆる「高山社跡」では、現在も母屋を中心に複数の遺構を残している。これは分教場操業時の屋敷構えを推測する上で極めて重要であるため、本節においてその概要を記載する。

現在の高山社跡には、母屋、長屋門、外便所などの限られた建築遺構が残る。高山社跡の入口である長屋門は、敷地の南東面、石垣上に存在し道路からは斜路によってアクセスする。長屋門を抜けると、正面に母屋が位置する。母屋の南側、長屋門との間の空間には築山を中心とする庭園が存在するが、これは分教場時代に設けられたものではない。このことは家相図や過去の航空写真からも明らかである（藤岡市教育委員会 2012)。現在の築山の南西側には二號蚕室が、北東側には一號蚕室と東蚕室が存在したが、現在これらは全て失われている。

母屋の南西隣り、二號蚕室跡との間には池を中心とする小規模な庭園が設けられているが、往時の錦絵にもこの庭園が描かれていることから、分教場当時から存在したものと考えられる。敷地の北側には、乾燥庫や桑貯蔵庫、焚屋などの建物が存在したが、うち焚屋のみが現存している。また建造物ではないが、母屋の北西側には屋敷神が配置されている。

３．下仁田町の春秋館跡

ここまで、高山社の成り立ちとその屋敷構え、さらに分教場の設置に関して簡単な概要を述べた。続く本章では、本稿の主題である春秋館跡に関して、その概要や敷地構成、庭園を中心に記述する。

１）春秋館跡の概要

春秋館跡は下仁田町西野牧に所在し、世界遺産の構成要素である荒船風穴の経営母体であった。また同時に庭屋静太郎が創設した高山社分教場や、国内各地から種紙を受託貯蔵し時期をずらして返却する種紙受託事業を行う蚕種貯蔵所を管理運営する組織としての側面も有していた。そのため明治時代の後半には、冷蔵部、製造部、委託販売部の３部署が存在していたことが判明している。このように春秋館は高山社分教場のみならず、養蚕に関連した複数の事業を手掛けていた。

２）春秋館跡の構成要素

養蚕業を営んでいた当時の春秋館は、多くの分教場と異なり街道（旧下仁田道）を挟み込む形で敷地が展開していた。ただし、現在春秋館跡として保存されているのは、その内の街道の西側に広がっていた主屋を中心とする部分である（図１)。街道の東側に展開していた敷地に存在した建築遺構等は全て失われており、大規模蚕室、分教場の学生達の寄宿舎、蚕室、氷庫、庭屋静太郎の隠居場が立ち並んでいたと伝える（下仁

田町教育委員会　2019)。よって本稿では街道西側の敷地に現存する遺構について記載する。遺構は、主屋の他に２階建ての蚕室と蔵が１棟、そして倒壊した小規模な蔵、および主屋の北西に位置する屋敷稲荷、主屋の西側に展開する庭園からなる。

ⅰ）春秋館跡の建築遺構

主屋は桁行 16.565m、梁間 7.536mおよび 7.698mの建物であり、その西側に池を中心とする庭園がある。後述する町田家や中里家といった藤岡市に存在する分教場建物と比較すると小規模な建物である。建築構造も、高山社において提唱されていた理想的な造りとはなっておらず、明治期以前の古い養蚕農家建築を改造したものであることが明らかとなっている。

主屋の北側に位置する蚕室は、桁行 6.435m、梁間 5.755mの２階建て木造建築であり、１・２階とも蚕室として使用されていた建物である。天窓や欄間を備えるといった特徴から、明治中期ころの近代養蚕農家建築であると考えられる。当建物は、1912年撮影の古写真にも写ることから、分教場時代から存在した建物であることが明らかである。

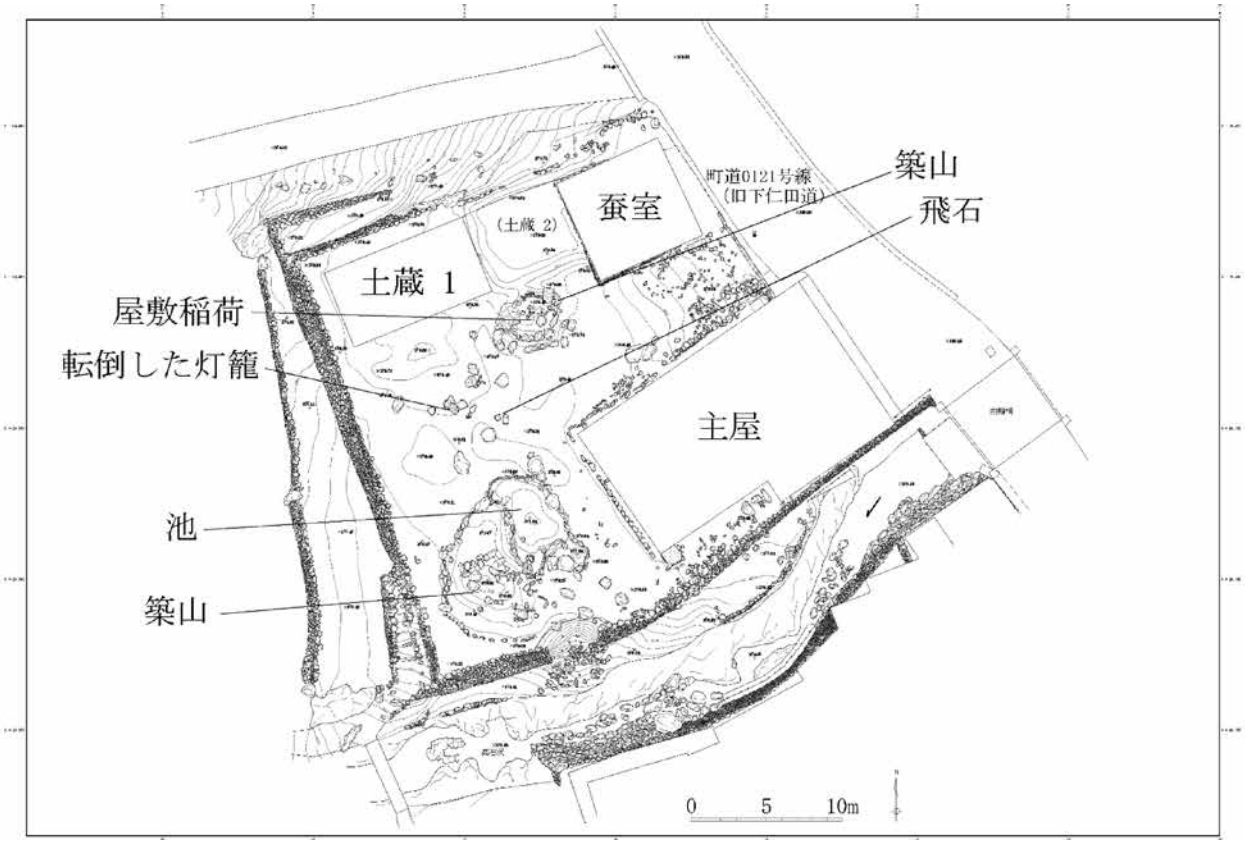

図１　春秋館跡　現状測量図（下仁田町教育委員会提供　一部改変）

ⅱ）春秋館跡の造園空間

春秋館跡では主屋の西側、鏑川に面したエリアに庭園が広がっている。この庭園はその構成から大きく２つに区分出来る。まず、主屋の西側正面に広がる池を中心とした庭園である（図２）。池底から陸部までの高低差は約1.5mを計る。現在は底部に腐葉土がかなり堆積しているため本来の深さは明らかではない。また護岸の目地はセメントモルタルで詰められている。池の西側には岩石で石組を施した築山（図３）があり、築山上には水路様の溝（図４）が確認される。現状、池の導水施設は明らかではないため、この池が山や沢から導水していたのか、それとも天水に頼っていたのかは不明である。ただし、築山上の溝が水路であった

場合、他所から導水することが必須となるため、池の水もその導水に依存していた可能性が指摘できる。

対して池を中心とした庭園の北側、土蔵１の正面では、飛石や灯篭、伽藍石が散見される露地風の庭が広がっている。現在は灯籠が転倒している他、飛石も半ば土や繁茂したリュウノヒゲに埋もれていることからかつての様相は明らかではないが、飛石は土蔵１の方向に続いており、主屋と土蔵を繋ぐ経路として飛石を設けた可能性がある。

さらに庭園の地盤から、石段を下りた箇所には珪化木が放置されていた。珪化木は庭石としても珍重される石材であることから、この石材が築山に据えられていた可能性もある。

ⅲ）屋敷稲荷

主屋の北西側には、大きな石材で積まれた築山上に小さな祠が存在する（図５）。築山を構成する石材は自然に積まれたものではなく、セメントモルタルによって固定されていることから、明治期以降に構築された築山であることが分かる。この築山は、土蔵２の正面に構築されており、物資の搬入出時に障害になったものと考えられる。よって、作業の支障になったとしても、この位置に屋敷稲荷を設けなければならなかった、何らかの理由があったと推測される。

図２　春秋館跡　池を中心とする庭園

図３　春秋館跡　築山（池に隣接するもの）

図４　春秋館跡　水路跡

図５　春秋館跡　屋敷稲荷

４．高山社分教場の屋敷構え

本章では、春秋館跡と比較するために、他の高山社分教場における屋敷構えの概況を提示する。比較対象として、群馬県内に存在する分教場の中からいくつかの遺構を選び出し、その選定に当たっては以下の条件を基準とした。

①分教場に関わる建築遺構が現存すること

②複数の建築物が残り、分教場当時の様相を推測出来ること

③敷地内において建築物以外の構成要素（庭園、樹木、屋敷神など）が豊富に現存していること

そして、これらの条件を満たす分教場の中から、町田洋家、縫島明家、中里多喜夫家を選定した。また黒澤英俊家は調査時間の都合上、敷地平面図の作成がかなわなかったため、今回は掲載を見送った。

１）町田洋家住宅（旧町田菊次郎家）

高山社第２代社長である町田菊次郎の生家であり、藤岡市本郷に所在する非常に大規模な養蚕農家遺構である（図６）。建物遺構としては主屋（図７）と蚕室、および井戸屋と蔵２棟（図８）が残る。主屋は１階部分の桁行が26.460mを計る大規模な建築である（藤岡市教育委員会　2013）。敷地の南側には明治28年の家相図に描かれた蚕室が現存しているが、建物の方向が家相図とは異なるため、いずれかの時期に移築されたと考えられる（藤岡市教育委員会　2013）。また、分教場時代には、現存遺構以外にも寄宿舎や家畜小屋等が敷地内に建てられていたことが家相図から明らかである。井戸屋は現在２棟あり主屋の北側に１棟、そしてもう１棟は主屋の南側に位置している。所有者曰く、前者は主に調理用に、後者は主に作業用に使用されたとのことであった。主屋北側の２棟の蔵は、西側から「クラ」および「ミソグラ」と呼ばれている。寄

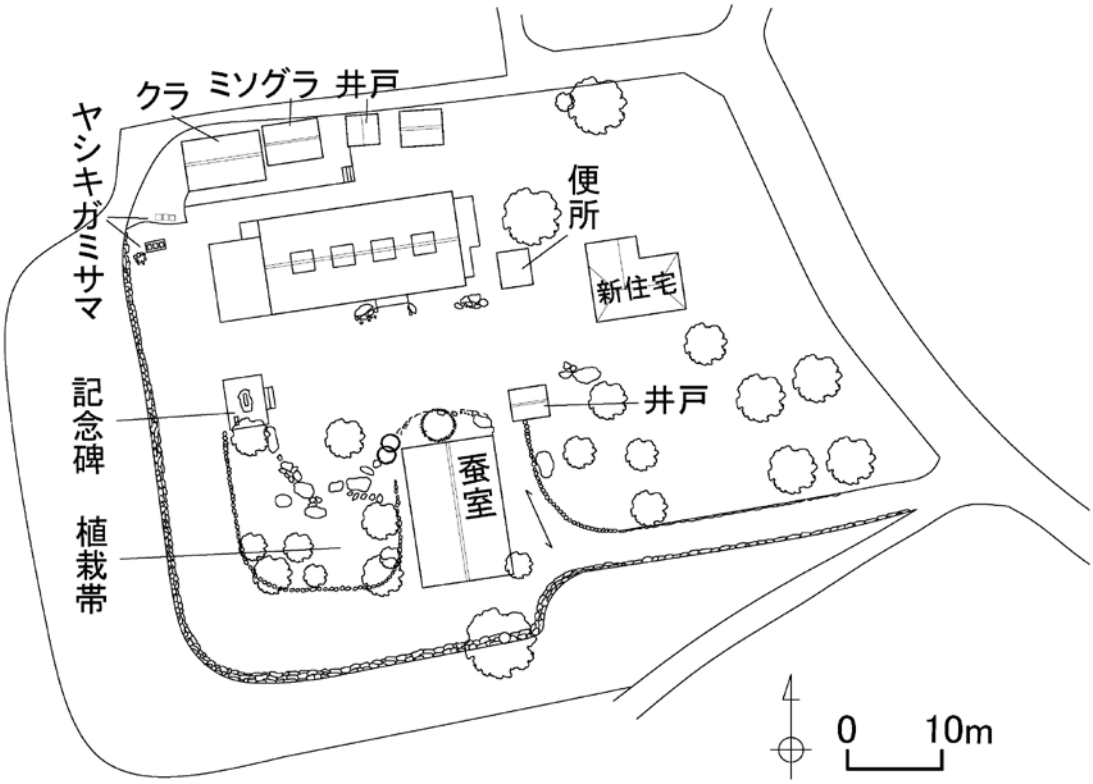

図６　町田洋家　現況平面図

宿舎は主屋の南西側に、家畜小屋は南東側に建てられていたが、現在では寄宿舎の位置に植栽帯（図９）が、家畜小屋の位置には近年建設された住宅が位置している。

建築遺構として大規模な主屋や蚕室が残る一方で、敷地内における樹木の数は比較的に少なく、分教場当時から残ると考えられるものは数本に留まる。主屋の東側、便所に隣接した位置にユズの古木があり、町田氏曰く、分教場当時から存在する可能性がある（図10）。また古木ではないが、敷地内ではカキが多数見られる。前述の植栽帯はフユザクラやサザンカなど観賞用の植物によって構成されており、分教場当時のものではない（所有者談）。敷地の外周西側から南側は数mの高さを持つ石垣によって補強されているが、これは近年町田氏によって建設されたものである。

主屋の北西側には複数の祠が祀られている。祠は石垣上段と石垣裾部に分かれて存在するが、町田洋氏曰く、上段の祠が古くなってきたため、新しい祠を石垣裾部に設置したとのことであった。なお当家では、これらの祠を「ヤシキガミサマ」と呼称しており、諏訪神社から勧請したものである。

調査の結果、寄宿舎や家畜小屋といった撤去された建物を含めて、当家の景観は分教場時代から大きく変化していると推測される。これは家相図との比較からも明らかである。聞き取り調査などから、現存する草木のほとんどは分教場時代の後に植えられたものであり、景石等も後年のものであることが判明した。よって当家には、分教場時代から庭園らしい庭園は存在せず、あくまでも食用となる柑橘類やカキが植えられていたのみと推測された。

図７　町田洋家　主屋

図８　町田洋家　井戸屋およびクラ

図９　町田洋家　植栽帯

図10　町田洋家　便所およびユズ

２）縫島明家住宅（旧塚越兵衛門分教場）

藤岡市中に位置する分教場であり（図11）、大規模な主屋が残る。本来は縫島家によって建設されたものではなく、塚越兵衛門が分教場として建設したものであった。主屋の北西側にはクラが現存しているが、現在はほとんど使用されておらず、荒廃が著しい。クラが未完成（漆喰が塗られていなかった）のまま縫島家に売却されたことが原因であると、当家では伝えている。

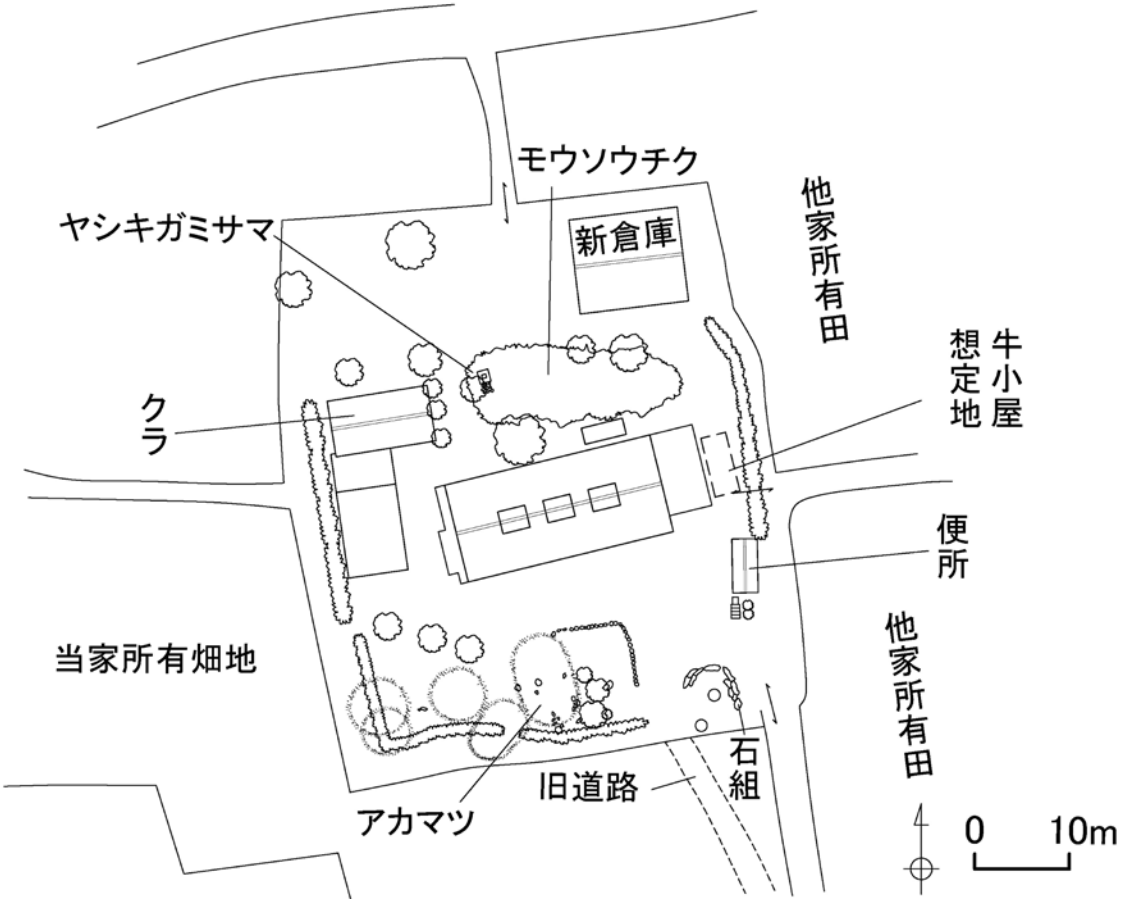

図11　縫島明家　現況平面図

図12　縫島明家　ヤシキガミサマ

図13　縫島明家　アカマツ

主屋とクラ以外に分教場時代から現存している建築遺構はないが、主屋の北西側には他の分教場と同じく「ヤシキガミサマ」が残っている（図12）。また便所も、分教場時代の施設ではないものの、その位置は当時から変化していないとのことであった。

主屋の前には作業空間があり、その南側には多数の樹木が植えられている。中でも、アカマツは樹齢数百年の古木であり、分教場時代から存在したものである（所有者談）。当家では、現当主の母が幼かった頃にこのアカマツの枝を主屋の縁から触ることが出来たと伝えており、かつての木の大きさが窺える。また、このアカマツの樹冠の下には多数の庭石が存在しているものの（図13）、その用途は不明とのことであった。石の多くは明確に据えられた形跡がないため、一時的に置かれただけのものと見られるが、そもそもこの石材がなぜ当家にもたらされたのか明らかではない。この庭石以外に庭園に関係する可能性のある遺構は見られず、南からの進入路脇に位置する石組も、近年構築されたものである。

敷地の南西部にはヒノキやヒバといった針葉樹の巨木が複数存在するが、かつては、さらに大きな針葉樹が敷地内に多数存在していたとのことであった。これらは「雷電木」と称され、建築物を落雷から防ぐ役割を担っていたと伝える。また主屋の北側にはモウソウチクが群生しており、竹林中に前述のヤシキガミサマが位置している。

家相図を確認すると現存遺構以外に、長屋門や大規模蚕室が存在していたことが分かる。大規模蚕室は、主屋の北側、現在では新倉庫が建つ位置に存在していた（藤岡市教育委員会　2013）。それ故に、敷地北側からアクセスできる進入路は当初からあったものではなく、隣接する住居が建設される際に設置された新しい道である。敷地南側の入口も分教場時代は位置が異なり、現在よりも西側に入口が存在した。分教場時代にはこの入口に前述の長屋門が構えられていたと考えられる。

３）中里多喜夫家住宅（旧中里寅蔵家）

今回記載した分教場遺構の中で、分教場時代の敷地構成を最も色濃く残している住宅であり、町田洋家と同じく藤岡市本郷に所在する。分教場を開設した初代中里寅蔵は町田菊次郎と１歳差であると共に、同じく本郷の出身であったことからよく菊次郎を支えた人物として知られる（藤岡市教育委員会　2013）。住宅の敷地は南北に長方形を呈し、敷地中央北寄りに主屋が位置する（図14）。主屋は明治32年上棟であり、高山社跡から８年ほど新しい建物である。町田洋家や縫島明家とも完成年代が近く、高山社の教えを反映した建物となっている。主屋の南側には２階建ての蚕室（図15）が立ち、主屋と簡素な渡り廊下でつながっている。往時は蚕室の南側により大規模な10間あまりの蚕室が存在したが、戦前に取り壊されたとのことで、現在は敷地内にその礎石が積まれて残っているのみである。

主屋の西側から北西方向には、長屋門や当家の屋号「神流館」が壁面に書かれたクラが並んで建つ。主屋の北西隅には「ヤシキガミサマ」と称される祠（図16）があり、さらにその東隣には井戸が存在する。ヤシキガミサマの北側、敷地の北西角付近にはかつて樹高の高い巨木が、雷電木として多数植えられていたとのことであった。

渡り廊下の東側、主屋と蚕室に挟まれた場所には、簡素な築山を備えるセメントモルタルで構築された池がある。この池は分教場時代のものではなく、養蚕業を廃業した昭和40年代に現当主の義理の父が設けたものとのことであった。往時は鯉が飼われており天水に依存した池（図17）である。

主屋の東側からはコンクリートで構築された細い水路が主屋の北側に向かって続いている。これは敷地内にたまった雨水を敷地外に流すためのものと考えられ、池に導水するためのものではない。

このように敷地の中央から北半には建物が立ち並んでいる一方で、敷地の南半は林地もしくは空地となっている。前述の通り、現存する蚕室の南側には大規模な蚕室が存在したことからその場所は空き地となっているが、蚕室の西側から南西方向にはいくつかの巨木が立ち並んでいる。全体的に大きな木が多く、アカマツやヒノキ、イトヒバ、ゴヨウマツ、ツバキが観察される（図18）が、分教場時代から存在したものかは明

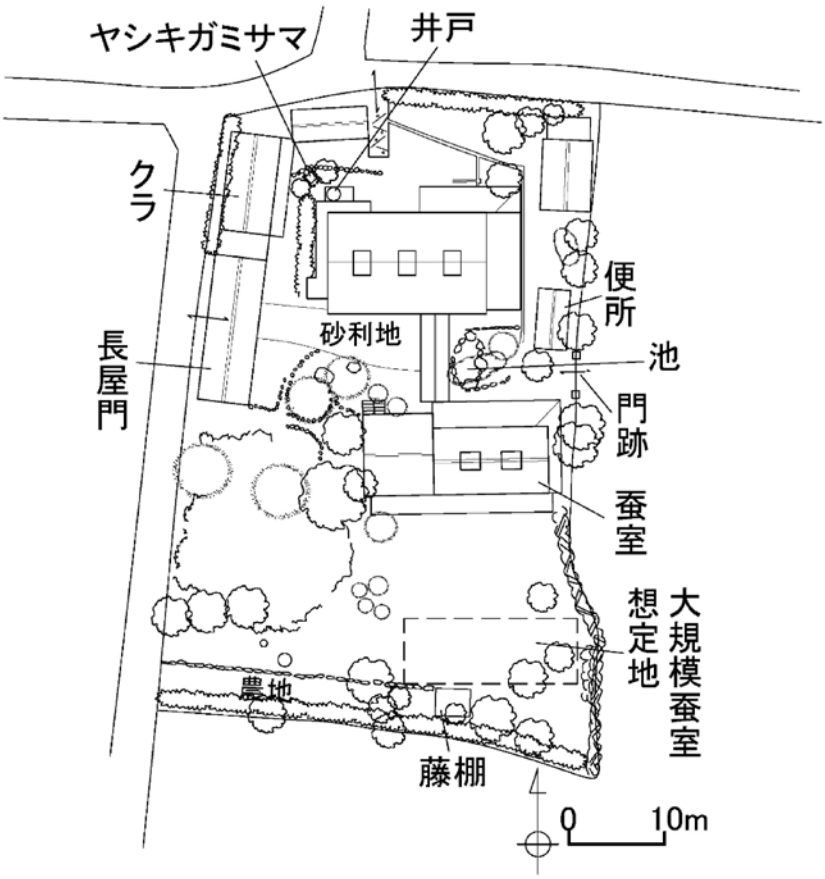

図14　中里多喜夫家　現況平面図

らかでない。ただし所有者の方曰く、昔から蚕室の西側から南西側は多くの木が生えていたらしく、分教場時代から似たような景観であった可能性が高い。その中には、オオシラビソの切り株が残り、この木は分教場時代から存在したものとのことである。このように中里家は町田家と比較して樹木数が多いことが明らかであるが、これらは決して庭園の様相は呈しておらず、雑然と植えられている印象である。よって中里家でも町田家と同じく、分教場時代から庭園は存在していなかったと推測される。

図15　中里多喜夫家　蚕室

図16　中里多喜夫家　ヤシキガミサマ

図17　中里多喜夫家　池

図18　中里多喜夫家　屋敷森

５．おわりに

ここまで、高山社とその主な分教場、そして春秋館跡の敷地内概況を記載した。そしてそれらを比較した結果、春秋館跡と他の分教場遺構にはいくつかの違いが見られることが分かった。

まず１点目は、庭園の有無である。調査を行った限り、春秋館を除く高山社分教場では、分教場時代の庭園は確認されていない。これは分教場が元来養蚕農家であり、観賞用の庭園を必要としないためであると考えられる。また、「土地高燥にして常に乾燥せる位置」、という記述が『最近養蚕法』に見られる（町田菊次郎　1915）ことから考えても、池を伴う庭園は通常設けられなかったと思われる。春秋館は単なる養蚕農家というだけではなく、荒船風穴の経営など商家的な特徴も備えていたことから、特別に庭園が設けられたと推測される。なお高山社跡でも池を備えた庭園が確認されていることから、今後両者の関係性をより詳細に調査することが必要である。

２点目は、屋敷神における違いである。高山社分教場を含めた群馬県の住宅では、屋敷の北西方に祠が設けられていることが多い。今回調査したいずれの物件でも屋敷神が確認されたが、春秋館跡ではその祠を屋敷稲荷と称しているのに対し、町田家や中里家では単にヤシキガミサマと呼称していた。勧請されている神も異なることから、高山社分教場に共通の屋敷神が存在していたわけではないことが分かる。

３点目は、屋敷構えにおける構成についてである。分教場における大まかな傾向として、主屋が南面して建ち、その前に広場状の作業スペースが広がる例が多い。これは『最近養蚕法』に記載された記述に倣ったものと推定される。現に、高山社の思想を反映した町田家や中里家、それに高山社跡の主屋はみな南面している。しかし春秋館跡では、主屋は南面せずに建てられている。また、主屋に隣接する作業空間も存在しない。主屋が南面しない分教場の例としては、藤岡市上大塚の折茂幹一家の例があるが、折茂家では主屋の東側正面に作業空間が存在している。春秋館跡では主屋に隣接して庭園が設けられているため、作業スペースを設ける場所がなかったものと考えられるが、作業スペースを差し置いて庭園が設けられている点が非常に特殊である。

このように、春秋館跡と他の高山社分教場遺構を比較した結果、春秋館跡における敷地構成の特異性が明らかとなった。特に庭園は、他の分教場遺構では存在しないものである。今後は、春秋館跡において庭園が設けられた背景を中心に、より詳細な調査を実施したい。

（参考文献）

伊勢崎市教育委員会『島村のたてもの：境島村養蚕農家群調査報告書』（2011）
大野　敏　ほか「近世末～近代における大規模養蚕農家の屋敷内建築の沿革について：群馬県伊勢崎市島村・田島健一家に関する遺構と史料の考察」『関東支部審査付き研究報告集』６（2010）
下仁田町教育委員会『町史編纂文文書等調査報告書　下仁田町指定文化財春秋館跡調査報告書』（2019）
関口覺「高山社分教場の役割とその実態」『群馬文化』328（2017）
関口覺『養蚕改革・高山社の全貌』（2022）
藤岡市教育委員会『史跡高山社跡保存管理計画』（2012）
藤岡市教育委員会『高山社と分教場－高山社の関連養蚕農家建築概要調査報告書－』（2013）
身近な祖先たちの思いをつなぐ高山社に学ぶ有志の会『農家と共に歩んだ高山社』（2015）
町田菊次郎『最近養蚕法』（大日本蚕糸会・1915）

謝辞

本調査研究を行うに当たっては関係各所に多大なるご協力をいただいた。
分教場遺構の調査に当たっては、町田洋氏とそのご家族、中里多喜夫氏とそのご家族、縫島明氏とそのご家族、ならびに黒澤英俊氏と岩崎宏行氏に、現在もお住まいのお宅をご案内いただき、貴重なお話を賜った。また調査の実施に当たっては、藤岡市教育委員会の針谷氏と秋谷氏に多大なご協力をいただいた。
春秋館の調査では、下仁田町教育委員会の秋池氏と山田氏にご協力いただき、多くの情報や資料を共有いただいた。
また、村田敬一先生には群馬県の養蚕農家に関わる貴重な情報をたくさん提供いただいた。
指導教官である粟野教授にも、報告書の構成や図面の作成において多大なご助言を賜った。
ここに記して、感謝申し上げる。